

# ふくしまのこえ

作詞：タグチヒトシ 作曲：畑中正人

合唱曲ふくしまのこえは

2015年9月に福島県文化センターにて  
福島在住の声楽家佐藤一成の指揮のもと  
約60名の参加者によって発表されました。

[voice.grinder-man.com](http://voice.grinder-man.com)

# ふくしまのこえ

作詞：タグチヒトシ 作曲：畑中正人

♩ = 130  
[シーン1]

5 9 全員で息をはく

Soprano 1  
スー フー スー フー

Soprano 2  
スー フー スー フー

Alto 1  
スー フー スー フー

Alto 2  
スー フー スー フー

Tenor 1  
息をはく  
スー フー スー フー

Tenor 2  
スー フー スー フー

Bass  
息をはく  
スー フー スー フー

13 V V V17 V V V V21 V V

S 1  
スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー

S 2  
スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー

A 1  
スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー

A 2  
スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー

T 1  
スー フー スー フー スー フー スー フー スー フー ザー ウー ズー

T 2  
*mf* ウー ウー ウー ウー *f* アー ゴウゴロアー

B  
*mf* ウー ウー ウー ウー *f* ズンアー ゾン



35 *mf* 37 *f*

S1  
アー アー アー

S2  
アー アー アー

A1 *mf* *f* 自由な音程で  
ララ ララ シ シ ウ ア ウ ウ ア ウ ウ

A2 *mf* *f*  
スー(息) ウー ドン ウー アー アー

T1 *mf* *f*  
ザ ロ ロ ソ ロ ロ ザ ロ スー(息) ユー ラー ドンドン ドン ガタゴト

T2 *f* 自由な音程で  
バル バラ オ ア オ ア オ ア オ ア

B *f*  
ゾーアー ズンアー ザ ザ ザ ザ ザ ザ ザ

41 45 *ff* 49  $\text{♩} = 115$  [シーン2]

S1 *gliss.* *ff*  
アー アー アー アー

S2 *gliss.* *ff*  
アー アー アー アー

A1 *ff* *gliss.*  
ウ ア ウ ウ ア ウ ウ アー アー

A2 *ff* *gliss.*  
アー アー アー アー

T1 *ff* *gliss.*  
ザー アー ハ ハ ハ ズンズンズン アー アー

T2 *ff* *gliss.*  
ドンドン ハ ガタガタ ドン アー アー

B *ff* *gliss.*  
ズンアー ダンダンダン ダンダンダン アー アー



68

S1 らー きー みー アー

S2 き み か ぜ と そ ら と アー

A1 き み と か ぜ と つ ち と う み と ほ し と す な と ゆ き と

A2 ひ と と み ち と み ず と そ ら き み

T1 す な ほ し と う み つ ち か ぜ と

T2 ア ア ア そ ら と き み と か ぜ と つ ち と う み と ほ し と

B ア ア ア そ ら と き み と か ぜ と つ ち と う み と ほ し と

75 *p*

77 *mf* リズムにのって、ことばはハッキリと

S1 アー

S2 きょう いま を きょう

A1 ず っと み つ め て い る いま を ず っと つ な げ て い

A2 ずー っと いま を きょう と いま を つ な

T1 ずー っと いま で も ずー っと き え な

T2 ずー と いま で も ずー っと き え な

B ザンー ア ザンー

82

S1  
S2  
A1  
A2  
T1  
T2  
B

いまをときがー はしるー かぜがー  
るいまを ず っとみつ めてい るいまを ず っとさが してい  
い で じ ぶ ん を あ の  
いはるのひ なつのひ あきのひ  
いそらと きみと かぜと  
アそらと きみと かぜと

86

88

S1  
S2  
A1  
A2  
T1  
T2  
B

ひびくー だれ の  
る どこ かの だれ かの  
ひ を ウ ア ア ど こ か  
ふゆのひ どこ かの だれ かの  
きみと ザン ザン ザン ザン ザ ザン  
きみと ザン ザン ザン ザン ザ ザン

90

S1

S2

A1

A2

T1

T2

B

こ え ど こ へ

いつ かの こと ばを どこ かに だれ かに

だ れ か い つか こ と ば ど こ かに

どこ かの だれ かの いつ かの こと ばを

ザン ザン ザン ザン ザザン い っ か こ こで

ザン ザン ザン ザン ザザン い っ か こ こで

94

96

S1

S2

A1

A2

T1

T2

B

ハ ハ ハ ハ ハハ ハ ハ とお い あー なた がー

アー とお い あー なた がー

い っ か ハ ララララララ ハ ララララララ

い っ か ハ ララララララ ハ ララララララ

きみ から つた えて ハ ハ ラララ ハ ハ ラララ

アー ハ ハ ラララ ハ ハ ラララ

い っ か ハ ハ ラララ ハ ハ ラララ

*ff*

*ff*

*ff*

*ff*

*ff*

*ff*

*ff*



98

S1 き こ え て る

S2 き こ え て る

A1 ハ ラララ ラララ ア ア ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ア ア

A2 ハ ラララ ラララ ア ア ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

T1 ハ ハ ラララ ア ア ア ア ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

T2 ハ ハ ラララ ア ア ア ア ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

B ハ ハ ラララ ア ア ア ア ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

103

104 少しおちついて

S1 き っ とー ず っ とー

S2 こころの いばしょと ことばの おきばしょ

A1 ア ア ア ア

A2 ハ ハ ハ ハ ハ ハ ア ア

T1 ア ア ア ア

T2 ア ア ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

B ア ア ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ

mf

f

mf

mf

mf

mf

mf

108

S1 き っとー ず っとー ア アー

S2 じぶんの なかには おさまり きれずに アー アー アー

A1 アー アー アー アー アー

A2 アー アー アー アー

T1 アー アー アー

T2 ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ アー アー

B ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ ハ アー アー

*mp* *rit.*

115

116 ♩ = 70 [シーン3] *p* *mp* *mf*

S1 アー アー ことばをていねいに みぎをみあげて ひだりふりむき めをあけてここ

S2 アー アー アー アー アー アー

A1 アー アー めをあけてここ

A2 アー アー めをあけてここ

T1 アー アー アー アー アー アー

T2 アー アー アー アー

B アー アー アー アー

121

S1  
アー アー アー うしろにはかげ まえをみてとぶ まばたきはせず アー

S2  
またひがのぼる うしろにはかげ アー まばたきはせず

A1  
またひがのぼる アー アー アー まばたきはせず アー

A2  
またひがのぼる うしろにはかげ アー アー まばたきはせず アー

T1  
アー アー アー うしろにはかげ まえをみてとぶ まばたきはせず (息をはく)

T2  
アー アー アー アー アー アー まばたきはせず アー

B  
アー アー アー アー アー アー まばたきはせず アー

125 *f* *mp*

126

129 (全員で息をはく)

133

S1  
アー スー フー スー フー スー

S2  
アー スー フー スー フー スー

A1  
アー スー フー スー フー スー

A2  
アー スー フー スー フー スー

T1  
フー スー フー スー フー スー

T2  
アー スー フー スー フー スー

B  
アー スー フー スー フー スー

## 「ふくしまのこえ」が生まれるまで

宮武弘（福島県立美術館学芸員）

「福島のこえ」は、福島のいま、福島に生きる人びとのいまの思いを、県民自身の手により表現し、発信したい……そんな思いから立ち上がったプロジェクトです。

2011年3月、福島を襲ったふたつの災害は多くの人びとから故郷を奪い、生活基盤を破壊しました。それから、はや4年半。復興という名のほの明かりは遠くに見えながらも、立ち止まり、或いは後戻りを繰り返しているのが現在の福島の姿ではないでしょうか。容易に戻らない日常に、疲弊する人びとの言葉にならない思いは、澱（おり）のように深く沈殿しているように感じられます。

いまこの場所で美術について考えるとき、揺るがせにできない尺度となるものがあるとすれば、それは何か。自問を重ねるなかで浮かんだのは「身体」の存在でした。いま福島に生きる、その存在証明となるものは生命の器たる身体をおいてほかにない、ならば、身体そのものによる表現こそが、福島のいまを語りうる最良の手段なのではないか。……それは結論であると同時に始まりとなりました。幸運にも、3人のアーティストがこのアイデアに力を貸してくださいました。

パフォーマンス・グループ「GRINDER-MAN」を主宰するタグチヒトシさんは、身体と環境の関係性を探りながら、舞台表現を軸に活動を続けてこられました。タグチさんが久しぶりに福島市を訪れた折りに、福島と合唱との繋がりを知ったことが、今回のプロジェクトに至る直接の契機となりました。「福島のこえ」の構想を伺ったとき、歌うこともまた身体表現のひとつであることに気付かされました。

作曲家・サウンドデザイナーの畑中正人さんもまた、アートや建築、映像など幾つものメディアを横断しながら音楽を紡いでおられます。まだ手探りで企画を進めていた頃、畑中さんから届いたデモ音源からは、微かな、しかし力強い呼吸音が聞こえてきました。ここから作品の構想は一気に具体化し、タグチさんとの協同作業によってひとつの楽曲が完成することとなりました。

最後に参加して下さった声楽家・合唱指揮の佐藤一成さん。福島県出身者としての思い、日々の表現活動を通じての率直な感情を注ぎ込んでいただけたことは、この企画を前進するうえで大きな活力となりました。公開制作の場では、強靱なバイタリティと指導力によって作品にみずみずしい生命を吹き込んでくださいました。

そして何と言っても、この作品に文字どおり血と肉を与えてくださったのは、今回ご出演くださった60名あまりの方々でした。美術館の主催で音楽を創るという、一見突拍子もないこのプロジェクトに快くご賛同、ご協力くださいましたことに心より感謝いたします。

こうして2015年9月21日、合唱曲「ふくしまのこえ」は産声をあげました。

しかしながら、これはまだ序章に過ぎません。今はまだか弱く小さなこの響きは、これからどのように成長していくのでしょうか。託されたバトンの重みと同時に、わくわくするような期待を感じずにはられません。こえが育まれていくように、これからの福島の歩みへと思いを馳せながら。

## 福島の合唱表現に新しい方法が生まれた！

佐藤一成（声楽家）

福島の合唱表現に新しい方法が生まれた！ 大げさに言えばそうなのかもしれない。創造的な音楽を創るという事が、成熟した福島の音楽業界には必要ではないかと思っていた。今回は、そういう意味でも非常に意義深い企画であったと思う。

勿論、この企画で終わってしまっただけでは、文化創造の道を創ってしまうモノであるからして、今後もこのような、聴衆を含めた文化創造の道を探求していかなければならない。

今回の企画に携わる事ができ大変嬉しく思う。願わくば参加者の皆様にとっても、刺激的だったこの思いを胸に、それぞれの日々の活動に生かして頂きたいと切に願う。

## 作曲とは「生きる」ということ

畑中正人（音楽家）

この曲は「スー」という息を吐く音からはじまります。私にとって息の音とは生命を象徴する音のひとつです。

私にとって作曲とは「生きる」ということを意味しています。ひとつひとつの音に命が吹き込まれていく美しさや躍動感を感じる喜びはとても一言では表現できません。

そして音楽そのものも生きています。作曲とはそれを感じる事の出来る方法のひとつです。たとえばタグチヒトシさんからいただいた言葉がきっかけとなり、ひとつのメロディーがある方向へ自然と進むこともありましたが、初演に際し熱心なご指導と指揮をして下さった佐藤一成さんの手によって曲に新たな解釈や表現が生まれることもありました。そして何より合唱に参加して下さったみなさんの歌声によってとても大きくて美しい命がこの曲に吹き込まれました。

私にとって人生初となる合唱作品はとても思い出深いものになりました。このような大変貴重な機会を与えて下さった福島県立美術館の宮武弘さん、そしてこの作品作りと初演を支えていただいた全ての皆様に心から御礼申し上げます。

## まあともかくやってみようじゃないか

タグチヒトシ（演出家）

福島県に住んでいる人々で福島発のなにかをつくりたい。2014年8月に東京で宮武さんとお会いして、打ち合わせもそろそろお開きという時にぼろりとおっしゃったのはそんな一言でした。その言葉が今でも僕をつきうごかしています。なにかとは、なんなのか。福島県の人々が自らの手で産み出す、その自主性はどこにあるか。市井の人々の参加は耳ざわりはいいものの、学芸会のような身内の楽しみで終わってしまわないか。

福島のことになると、どこかかしこまってしまう。福島に住んでいない僕が自分自身に感じるのは、気づかないうちにこさえた垣根がどんどん高くなってしまっていることです。当事者の言葉が意図せず叫びとして増幅されてしまったり、一方通行の強度をもって我が物顔で闊歩してしまうこれまでを見てきた。大河の流れに足をすくわれるのは正直怖い。

僕は、もう少し肩の力を抜こうよ、という緩いボールを投げたい。心にささった棘の開陳や、マジョリティへの一矢としての号令ではなくて、前を向いて歩いている人々の背中を押していきたい。表現が価値を持つのは、それを受け取ったというただそれだけの純粋な行為が、人の心を動かしてしまうところにあります。経済や人間関係のしがらみに左右されず、誰かの営みにわたしの心が動いてしまう意外性。作用する実直を探そう。

2014年11月に福島へ行き、様々な劇場を周ったときに知ったのが、合唱表現が地に根付いているという福島の一面でした。僕は合唱については全くの門外漢です。とはいえ、舞台があつて客席があり、誰かの目前で時間と空間を共有して表現するあり方はダンスも合唱も同じだろうから、まあともかくやってみようじゃないかと身の程知らずに膝を打ちました。合唱という表現を形にすること、その過程を一步ずつ前に進めていくことに決めました。

合唱曲「ふくしまのこえ」を作曲くださった畑中さん、そして合唱指揮をとってくださった佐藤さんとの出会いは奇跡でした。僕らの心に静寂を誘う畑中さんの旋律に佐藤さんの熱意が掛け合わさったことは、楽譜から歌が立ち昇っていく大きな牽引力になったと確信しています。

福島県文化センターの発表会にご参加くださった皆さん、本当にありがとうございました。お互いをあまり知らない状況で2日間で歌い上げるなんていったいなにがどうなるか。先がみえないドキドキが、もしかしたらいい方向に働いたんじゃないかと勝手に思っています。

そしてこの度の機会を与えてくださった福島県立美術館の宮武さんに深謝を申し上げます。まだここに無いなにかを見つけて磨き上げていくことは、信じてくださらないことには始まりません。途中で不安の種が芽生えること無く完遂出来たのは、粘り強くことにあたってくださいましたご姿勢あつてこそでした。

最後に、これをお読みに皆さんにお願いがあります。この楽譜を公開することにしたのは、僕らが生み出したものを誰かに受け取って欲しいからです。それが宮武さんがおっしゃった言葉――なにかが福島から羽ばたいていくこと、なのだと思います。叶うならば歌って欲しい。もし僕らが観ることのできる機会があるならば是非ご一報ください、必ず聴きに行きます。

# ふくしまのこえ

2015年9月21日 発表

作詞 タグチヒトシ

作曲 畑中正人

お問い合わせ

福島県立美術館

〒960-8003 福島県福島市森合西養山1番地

tel. 024-531-5511 fax. 024-531-0447

netmaster@art-museum.fks.ed.jp

本楽譜は著作権法に定める使用の限りにおいてご自由にご使用いただけます。本楽譜の全部または一部の複製（印刷等）、転記、抽出、翻案等の利用に際しては福島県立美術館までお問い合わせください。